

Fukuoka University MEDICAL SCIENCE NEWS

No. 81

編集・発行
福岡大学医学会
福岡大学医学部内

福岡大学医学会ニュース

15年の変遷に思う

福岡大学名誉教授 井上 隆司



2005年4月に九州大学医学部薬理学より福岡大学医学部生理学に赴任してからあっという間の15年間でした。初代の富田忠雄教授、次の今永一成教授が綿々と築き上げられて来た教室を引き継ぐということで、大変身が引き締まる思いがしたことを昨日のように思い出します。私が大学院生だった頃は、生理学と薬理学の交流が盛んで、親密なファミリーのような関係にありました。そのような経緯から2002年に福岡で日本生理学会・日本薬理学会の合同年会を共催しその際に事務局長を務めたことが、図らずも福岡大学でお世話になる機縁となりました。

福大赴任直後は、池原先生、出石先生らを中心としたテュートリアル教育が、基礎医学教育の要となっていました。周到に準備された課題をもとに、教員が総出で真剣に学生と向き合っている姿には大変感銘を受けました。ある時、不覚にも大渋滞につかまり打合わせ会議に10分ほど遅刻し、厳重な注意を受けたことがあります。大変恐縮すると共に、福大の医学教育に対する使命感の強さを感じました。

赴任当時の福大医学部生の印象は大変おおらかで素直で協力的なことでした。彼らこそが福大が誇る「あたたかい

医療」の原石となっていたのだと今にして気づかされます。その後の十数年間では、文科省の主導で急速な大学改革が進み、それに伴って受験改革も繰り返し行われました。しかし皮肉にも、医学を学ぶことを、医師として社会に貢献するためではなく人生設計の手段として割り切っている学生の割合が年々増えてきています。入試の多様化によって幅広い人材を求めているつもりが、受験技術に長けた入学者を増やし、潜在力のある学生への門戸を狭めてしまったのではないかと危惧しています。また、文科省推奨の「内部質保証」というスローガンの下に、大学指導部によるガバナンスが強化されてきました。このことで組織改革がスピードアップされたことは事実ですが、同時に様々な局面で現場との乖離による弊害も目につきます。現内閣の混乱した状況を他山の石として、今後どうバランスを取っていくべきなのか再検討する時期にきていると思います。

最後になりましたが、在職中は医学部構成員の皆様大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。今後も、福岡大学医学部が一体となり益々の発展を遂げていくことを祈念いたしております。15年間誠に有難うございました。

福岡大学と共に育った 46 年

福岡大学名誉教授 出石 宗仁

昭和49年6月に医師として歩み始めてから本年3月までの約46年間のうち、研修医として1年、第2内科（のち心臓血管内科）に23年、教育計画部に14年、総合医学研究センターに5年間と、そのほとんどを福岡大学で過ごさせて戴きました。当初は、現在の研究棟本館の1階に図書館が、医学情報センターの場所には民家があり、国試浪人の人達の学習室として利用されていたと記憶しています。その後研究棟別館、医学情報センターの建設、地下鉄とつながる新診療棟の開設と続き、外観も内容も大きく変貌していく姿を目の当たりにしながら過ごしてきました。各講座の初代教授には個性の強い方もおられ、その背中から多くの事を学ばせて戴きました。前半は高血圧を中心とする診療と研究、後半は10年間の教務委員を含め学生教育に携わりました。初々しい1年生から医師として活躍されるまでの皆さんの姿を眺めながら、多くの先生方との交流があり診療・研究・教育の全てにおいて福岡大学に育てられたと思っています。

医学会例会には助教授を拝命したころに1回だけ発表させて戴いたことがあります

が、内容を思い返しますと非常に拙いもので、近年の皆さんの素晴らしい発表内容にはいつも感激していました。

在職中の70歳を前に車の運転をやめて公共交通機関利用の通勤に変更しましたが、地下鉄、バス共に65歳以上に優しい制度があり恩恵を享受しています。退職後は城南区医師会を退会して早良区医師会に入会し、早良区で週2日、城南区で半日の外来診療を続けさせて戴いています。

医学部はまもなく創立50周年を迎えられますが、皆さんの個の力を結集し和をもってチームとして大きく発展されることを祈りながら、学外から見守っております。



福岡大学医学会第82回例会および第43回総会（報告）

■日時/令和2年9月23日（水）17:30～19:15 ■場所/医学部講義棟3F RI大講堂

1. 第82回福岡大学医学会例会 【進行】集会幹事 平井 郁仁

- 1) **開会の辞** 集会幹事 平井 郁仁
- 2) **会長挨拶** 医学部長 小玉 正太
- 3) **第22回福岡大学医学会賞受賞論文講演**
 - ① 講演者…木下 義晃（筑紫病院呼吸器内科） 座長…鍋島 一樹
「Hemizygous loss of NF2 detected by fluorescence in situ hybridization is useful for the diagnosis of malignant pleural mesothelioma」
 - ② 講演者…中尾 明（呼吸器内科） 座長…藤田 昌樹
「Osimertinib in elderly patients with epidermal growth factor receptor T790M-positive non-small-cell lung cancer who progressed during prior treatment: a phase II trial」
 - ③ 講演者…十時 崇彰（麻酔科） 座長…秋吉 浩三郎
「Serum histone H3 levels and platelet counts are potential markers for coagulopathy with high risk of death in septic patients: a single-center observational study」
- 4) **第22回福岡大学医学会賞金賞論文投票**
- 5) **新任教授講演**
 - ① 講演者…藤田 孝之（生理学） 座長…小玉 正太
「新規治療確立のための、生理学からのこころみ」



講演された先生方と（左から、小玉会長、中尾先生、木下先生、十時先生、平井先生、藤田（孝）先生）

2. 第43回福岡大学医学会総会

- 1) **議事** 【進行】庶務幹事 鍋島 茂樹 ① 報告事項 ② 令和元年度会計報告および令和2年度予算案 ③ その他
- 2) **第22回福岡大学医学会賞授賞式** 【進行】集会幹事 平井 郁仁 ① 開票結果発表 ② 授賞式
- 3) **閉会の辞** 集会幹事 平井 郁仁

福岡大学医学部 17年間の良き思い出

福岡大学名誉教授 田中 正利

私は2003年4月に福岡大学医学部腎泌尿器外科学講座の第三代主任教授に就任し、17年間同講座を主宰しました。この間福岡大学医学会会員の皆様には大変お世話になり深く感謝申し上げます。

私の診療面における専門分野の一つは泌尿器科領域の腹腔鏡手術で、九州大学在職中から副腎腫瘍や腎癌に対する腹腔鏡手術を数多く経験しました。福岡大学赴任後は、高度先進医療の認定を目指し、難易度の高い前立腺癌に対する腹腔鏡下前立腺全摘除術に取り組みました。2006年2月に高度先進医療に承認され、また保険診療の施設基準もクリアし、前立腺癌に対する第一選択の標準術式になりました。2015年8月には九州で最初に導入した最新型手術支援ロボット「ダヴィンチXi」を用い、ロボット支援下前立腺全摘除術を行いました。その時の感動は今でも脳裏に焼き付いています。ロボット手術はより低侵襲で精密な手術が可能で、制癌効果と機能温存にも優れており、腹腔鏡手術に取って代わる標準術式になりました。

研究面では尿路性器感染症の基礎的・臨床的研究に取

り組みました。特に、福岡市において分離した多剤耐性淋菌の耐性機序を遺伝子レ

ベルで解明するとともに、耐性菌にも強い抗菌力を示す併用療法の研究開発を行いました。また大学院生が微生物・免疫学の永山前教授、細胞生物学の白澤教授、再生・移植医学の小玉教授のご指導のもと、それぞれ優れた研究成果を収めることができました。

本年4月からは福岡大学に近い、早良区野芥にあります福岡西会病院に勤務しています。同病院は福岡西南部における二次救急医療の基幹病院としての役割を果たしています。福岡大学出身の古屋部長との常勤医2名体制で泌尿器科一般診療を行っています。また院長代行として医療安全管理などを担当しています。これまでの経験を活かし地域医療の充実と向上に貢献したいと考えています。最後になりますが、福岡大学医学会の益々のご発展をお祈り申し上げます。



医師国家試験 結果報告

第114回医師国家試験(令和2年2月8～9日実施)に138人が受験し、123人(新卒92人・既卒31人)が合格しました。合格率は89.1%、新卒のみの合格率は93.9%でした。

看護師・保健師 国家試験結果報告

第109回看護師国家試験(令和2年2月16日実施)に100人が受験し、97人(新卒)が合格しました(合格率97%)。また18人(新卒)が第106回保健師国家試験(令和2年2月14日実施)を受験し、18人全員合格しています(合格率100%)。

祝 第22回福岡大学医学会賞

50音順



木下 義晃

Hemizygous loss of NF2 detected by fluorescence in situ hybridization is useful for the diagnosis of malignant pleural mesothelioma



十時 崇彰

Serum histone H3 levels and platelet counts are potential markers for coagulopathy with high risk of death in septic patients: a single-center observational study



中尾 明

Osimertinib in elderly patients with epidermal growth factor receptor T790M-positive non-small-cell lung cancer who progressed during prior treatment: a phase II trial

楽しかったチャレンジな 福岡大学での生活

福岡大学名誉教授 田村 和夫

本年3月、22年半の福岡大学での診療・教育に終止符をうちました。SARS-CoV-2 pandemicもあって、晴耕雨読で研究（厚生労働省科学研究 がん対策推進総合研究事業）を継続し、退任後も充実した毎日を送っています。これもひとえに3月まで一緒に仕事をしてくださった医学部・病院の方々の協力と支援があつてのことと心より感謝申し上げます。

福岡大学に赴任する前は、宮崎の県立病院の一内科医として24時間患者とともにあるという生活でしたが、教育が中心の生活に大きく変わりました。私にとっては一つの大きなturning pointでした。

振り返ってみますと、在籍時の医学部・病院は大きな変革の時代であり、本当に多くのことがありました。しかし、学部学生、大学院生たちが講義やBSL、研究を通して力をつけ成長していくのを見るのは教師冥利に尽きます。また、研修医や助手が知識と技術を磨き、専門医の資格をとって地域医療に貢献しているのをみますと、全身が診られる臨床医を「継承」できたと思っています。さらに、米国での5年

の臨床修練から帰国して初めて経験したATL患者からライフワークのアイデアをも

らい、日本ではまだ認知されていなかった腫瘍内科、支持・緩和医療領域の学会設立・発展にかかわり、そして厚生労働省のがん対策に参画するなど多くの仕事ことができました。

私は、過去の失敗や辛かったことは、その原因を追究し反省すべきことは反省しその後は忘れる。楽しいことや良かったことは心にとどめ、それをさらに前向きにチャレンジ・発展させることに努力してきました。福岡大学には、それが実践できる自由で学際的な雰囲気があります。とくに医学部にはそれを強く感じます。これからもぜひこういった環境を維持し、福岡大学医学部がますます発展していけることを祈念して退任の挨拶とします。



学位取得 次の方は、福岡大学より博士（医学）を授与されました。

課程修了による学位取得者 [令和2年3月16日付け]

- | | | | |
|---------------|---------------|----------------|---------------------------------|
| ・西 憲祐(人体生物系) | ・打田 愛(病態構造系) | ・瀬戸口 大介(病態機能系) | ・後藤 綾子(先端医療科学系) |
| ・平石 敬三(人体生物系) | ・木下 義晃(病態構造系) | ・土井 庸直(病態機能系) | ・牟田 芳実(先端医療科学系) |
| ・山道 光作(生体制御系) | ・玉木 慶子(病態構造系) | ・平瀬 正康(病態機能系) | ・葛原 誠太(先端医療科学系) |
| ・譚 佳梁(生体制御系) | ・丸尾 達(病態構造系) | ・飯田 仁志(社会医学系) | ・BAYARAA BOLORTUYA
(先端医療科学系) |
| ・吉村 雅代(病態構造系) | ・矢次 彩(病態構造系) | ・大串 祐馬(社会医学系) | ・山下 素樹(先端医療科学系) |
| ・天本 宇昭(病態構造系) | ・柴田 光史(病態機能系) | ・畑中 聡仁(社会医学系) | |

論文提出による学位取得者 [令和2年3月16日付け]

- | | |
|---------------------|---------------------|
| ・楠本 剛(福岡東医療センター麻酔科) | ・川添 美紀(衛生・公衆衛生学 助教) |
| ・廣田 一紀(福岡徳洲会病院麻酔科) | ・柳田 育美(内分泌・糖尿病内科) |

退職にあたって

—福岡大学医学部へ期待すること—

福岡大学名誉教授 西村 良二



私は昭和50年に入職し、平成元年からは広島大学に勤務しましたが、平成11年に福岡大学へ戻って20年半、合計33年6ヶ月、福岡大学医学部にお世話になりました。この間、大過なく、仕事を全うできましたのも、皆様のおかげであると感謝しております。

さて、二つのことを述べたいと思います。

1. いつも診療が新鮮であるために

診療を始めて5、6年もすると、ある領域の診療に限っては、もう教授にも負けないという自信がつくかもしれません。しかし、それは一方では、慢心、診療のマンネリ化の始まりです。それを避け、いつも診療が新鮮であるためには、診療をしながら研究をすることでしょう。現在、研究のしかた、論理的な考えの進め方を学べるのは、大学院への進学しかないと思います。また、大学院生が増えれば、医学部全体のポテンシャルが高まります。一人ひとりの医師のためにも、医学部のためにも大学院進学者が増えることを期待しています。

大学院生になって、生涯続く友情が育まれることがあります。これは医局に在局するだけでは体験できない不思議といえます。

2. 関連領域の仕事に携わってみること

広島大学総合科学部での大講座制の体験、広島大学医学部保健学科でコメディカルの方々に交じって仕事をした経験は大きいものでした。皆さんも、もし、チャンスがあれば、他の関連領域で仕事をしてみるとよいと思います。医学科での常識、言葉が通じないのです。ですから大変に勉強になります。その場所から医師の世界を見つめなおしてみるのです。まだ若い時期（30歳代後半くらい）に、ヒエラルキーのない（少ない）世界を味わってみるのもよいことです。

教授も、チャンスがあれば「他の世界をみてこい」と若いスタッフを送り出してもらいたいものです。

それでは、福岡大学医学部、福岡大学医学会が今後ますます発展しますことを祈念し、退任の挨拶とします。

長い間ありがとうございました

令和2年3月1日～令和2年9月30日までに退職された方

- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| ■ 出石 宗仁 教授（総合医学研究センター） | ■ 宮林 郁子 教授（看護学科） |
| ■ 井上 隆司 教授（生理学） | ■ 竹田津 英稔 准教授（内視鏡部） |
| ■ 兼岡 秀俊 教授（看護学科） | ■ 野見山 崇 准教授（内分泌・糖尿病内科学） |
| ■ 田中 正利 教授（腎泌尿器外科学） | ■ 東 みどり子 准教授（麻酔科学） |
| ■ 田村 和夫 教授（総合医学研究センター） | ■ 松本 武格 准教授（呼吸器内科） |
| ■ 中島 衡 教授（腎臓・膠原病内科学） | ■ 渡辺 信和 准教授（細胞病態解析学講座） |
| ■ 永田 忍彦 教授（筑紫病院呼吸器内科） | ■ 位 藤 俊一 講師（呼吸器・乳腺内分泌・小児外科） |
| ■ 西村 良二 教授（総合医学研究センター） | ■ 岩田 敦 講師（循環器内科） |
| ■ 原田 春美 教授（看護学科） | ■ 竹内 寅之進 講師（耳鼻咽喉科） |

以上、3月31日付け

新風

new phase

令和 2 年 4 月 1 日付けで
本学へ赴任、昇格された方に
自己紹介をしていただきました。



腎泌尿器外科学
教授
羽賀 宣博

令和2年4月1日付で、福岡大学医学部 腎泌尿器外科学講座の主任教授ならびに診療部長を拝命いたしました。私の経歴は、福島県立医科大学を卒業後、福島県内で継続して医師としての研鑽を積んでまいりましたが、この度ご縁を頂き、福岡大学に参りました。安全・安心の医療のご提供、世界水準の泌尿器科研究の発信、そして、若手泌尿器科医と未来の医師の育成をモットーに努力をしています。しかしながら、着任後すでに4ヶ月が過ぎましたが、まだまだ悪戦苦闘の毎日です。1日でも早く、皆様のお役に立てるよう、さらなる研鑽に努めます。

私の趣味は散歩で、10年間続けております。こちらに着任後も、帰宅時は拙宅までの40分間の散歩を日課にしています。私が生活していました福島は夏が短く、暑い真夏は自分にとってはご褒美で、毎年楽しみにしておりました。福岡は予想以上の暑さで、夜間にもかかわらず散歩から帰ると汗だくで、暑さがうれしいような、秋が待ち遠しいような気持ちです。

主任教授ならびに診療部長は、私にとっては大変な重責ですが、福岡大学医学部腎泌尿器外科学講座の伝統を引き継ぎ、更なる発展を目指して、粉骨砕身努力をしてまいりますので、皆様の温かいご指導・鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



生理学
教授
藤田 孝之

この度令和2年4月1日付で、福岡大学医学部生理学講座の主任教授を拝命いたしました。私は福岡県で生まれ育ち、横浜市立大学医学部に進学しました。生理学の教員、内科医として研究・教育・臨床の経験を重ね、この度福岡に戻ってまいりました。

私は大学卒業後、循環器内科の大学院に進みました。救命救急センターのCCUに配属いただき、急性期の診療に従事しました。毎日救急車で搬送されてくる心肺停止、急性心筋梗塞、不整脈などの患者様を診療する中で、循環器疾患の治療方法の改善の必要性を強く感じ、「基礎医学研究から、患者様がより安心して受けることができる治療法の確立を目指したい」と考えるようになりました。循環制御医学講座（生理学講座）でも研究を開始し、その後教員として、大学院生や海外からの留学生の方々とともに研究を進めてまいりました。

今後も臨床をはじめ広く様々な分野からリサーチマインドを受け入れ、サポートをさせていただきたいと考えております。浅学の身でございますが、ご指導・ご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。



腎臓・膠原病内科学
教授
升谷 耕介

令和2年4月1日付けで福岡大学医学部腎臓・膠原病内科教授、福岡大学病院腎臓・膠原病内科および血液浄化療法センター診療部長に就任いたしました。平成29年に福岡大学に着任して3年、多くの方に出会い、支えられ

て今回の昇任に至りました。皆様方には心より感謝申し上げます。私は平成6年に九州大学医学部を卒業し、同第二内科（現病態機能内科学）に入局、以後「検尿異常から透析・移植まで腎臓内科の全ての領域に対応すること」を目標に研鑽を積んで参りました。福岡大学におきましても腎病理診断と最新の内科的治療による腎臓病の進行阻止を目指し、末期腎不全に達した患者にはあらゆる腎代替療法を提供し、QOLの向上と長期生存を達成することをモットーに診療、教育、研究に従事しております。一方、膠原病は多彩な全身症状、独特の臓器合併症を示し、内科医としての総合力が問われる領域です。腎臓は膠原病の主要な標的臓器であり、腎病理診断や血漿交換療法など、腎臓内科が持つ診療ツールが有用です。2つの領域をうまく融合させ、高い専門性を持ちつつ、全身を診る内科を目指して社会に貢献して参りたいと思います。福岡大学3病院のうち、腎臓内科、膠原病内科は福岡大学病院にしかございませんが、今後は筑紫病院や西新病院との連携を積極的に進めて参りたいと考えております。今後ともご指導・鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



看護学科
教授
江藤 真紀

令和2年4月1日付けで医学部看護学科教授を拝命いたしました。教育・研究職として24年目にして、福岡大学に貴重なご縁を頂戴いたしましたこと、心より感謝申し上げます。

私の専門は、公衆衛生看護学でございます。教育面では、保健師としての思考力・想像力・応用力を備えた学生の育成に力を注いで参りました。特に、客観的判断と評価ができ、社会のニーズに対応できる能力をもった学生を育てるよう心がけております。到達目標を明示し、視覚教材と配布資料を有機的に連動させ、参考文献を紹介することで学生が自主学習を拡大できるようにしています。

研究面では、地域在住高齢者の転倒発生メカニズムの解明などに取り組んでおります。顕在潜在の健康問題の実行可能な解決方法を探りながら、研究成果が出せるよう努めております。

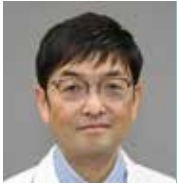
本学の建学の精神を会得し、他者を尊重する人間味豊かな学生たちの人格形成に尽力する所存でございます。自分自身が学ぶ姿勢を忘れず、人間味を大切に、学生とともに成長できるよう切磋琢磨いたします。これまでの経験を最大限に活用し、さらに努力を重ねることで、本学に貢献する所存でございます。ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



看護学科
教授
緒方 久美子

令和2年4月1日付で福岡大学医学部看護学科教授を拝命いたしました緒方久美子と申します。私は、九州大学医療技術短期大学部看護学科を卒業後、九州大学医学部附属病院集中治療部での勤務を経て、千葉大学看護学部および同大学院看護学研究科に進学し、修了後看護系大学教員としてのキャリアをスタートさせました。学部教育では主に成人看護学、大学院では成人療養支援領域（修士論文コース）とクリティカルケア看護領域（高度実践看護師コース）を担当させていただいています。また研究では、心疾患患者の看護およびクリティカルケア看護に関するテーマに取り組んでおります。

私は、福岡大学に赴任して10年目になります。現在は来年度から始まる新カリキュラムに向け、学部生の看護実践能力向上のための新たな教育方法について模索しています。学科教員、実習施設の皆様のお力添えをいただきながら時代に合った教育を実践していきたいです。また、九州で3箇所しかないクリティカルケア看護領域の高度実践看護師コースをもつ大学院として、学生個々の専門性・ニーズを踏まえた最新の教育の場を提供できるよう関連部署の皆様と連携を進めてまいります。今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

筑紫病院循環器内科
教授

河村 彰

令和2年4月1日付で福岡大学筑紫病院 循環器内科の教授に就任いたしました、河村 彰と申します。

私は平成6年に福岡大学医学部内科学第二講座（現在の心臓・血管内科学）に入局し、福岡大学病院や済生会福岡総合病院などで、主に冠動脈インターベンション、すなわち虚血性心疾患や心不全といった疾患を中心に、循環器の臨床に従事いたしました。福岡大学病院では冠動脈疾患患者を対象とした臨床研究を行い、その研究論文の一つで学位を取得いたしました。その後、ドイツのミュンスター大学へ留学し、脂質と炎症性サイトカイン、動脈硬化についての研究を行い、論文発表いたしました。帰国後の平成25年からは、福岡大学病院 卒後臨床研修センター副センター長に就任し、医学教育にも携わりました。今後、臨床、研究、教育へバランス良く注力していきたいと考えております。

さて、赴任した福岡大学筑紫病院は、地域医療支援病院であり、地域医療への貢献が本命題です。広く地域に開かれた病院を実践すべく、まずは病診連携ネットワークの構築が急務であると考えております。当科においては、「選ばず」「断らず」をキーワードに、病診連携に特に積極的で、常に地域医療への貢献意識を持った診療を実践したいと考えております。

未曾有のCOVID-19大流行により、イメージとはかなり違う教授就任となってしまいましたが、今できることを実践し、流行収束後のV字回復の準備を怠らない様、心がけたいと考えております。皆様のお力添えを、是非とも宜しくお願い申し上げます。

筑紫病院呼吸器内科
教授

石井 寛

令和2年4月1日付で、福岡大学筑紫病院呼吸器内科の診療部長に就任いたしました。同日より第二種感染症指定医療機関である当院の感染対策委員長を拝命し、COVID-19感染症に対する連日の対策会議や第一線での診療に携わっております。私は平成7年に長崎大学医学部を卒業し、長崎大学、宮崎大学、大分大学などを経て、平成25年に福岡大学に中途入局いたしました。これまで多くの方々に支えられて今回の就任に至り、皆様には心より感謝申し上げます。現在当科は6名体制で診療にあたっており、喘息や肺炎などのcommon diseaseから、肺癌、間質性肺炎等の難治性疾患に至るまで、多様化した呼吸器疾患全てに対応しています。当院は市中病院的側面を併せ持った地域医療支援病院でもあり、若い医師にとっては救急医療から高齢者医療まで経験することができ、臨床研修に適した施設と言えます。これからの時代のニーズを見越し専門技術を身につけた総合医の育成や、この地でできる臨床研究とともに、地域の方々や医療機関のお役に立てるよう尽力してまいります。

筑紫病院病理部・病理診断科
教授

二村 聡

令和二年四月一日付で岩下明德教授の後任として筑紫病院病理部・病理診断科教授および診療部長を拝命し、過日着任いたしました。小職は平成七年に久留米大学医学部医学科を卒業後、直ちに東京慈恵会医科大学病理学教室に入門し、国立がんセンター中央病院臨床検査部病理診断部門勤務後、平成十六年十月に福岡大学に赴任し、

令和二年三月末日まで消化管疾患を中心とした外科病理診断に従事してきました。その間、荒波に揉まれながら、臨床に真に役立つ病理診断とは何かを学びました。とりわけ消化器領域では内科、外科、内視鏡部門、放射線部門、病理部門の良好な協力体制がなければ診療そのものが危ういものとなってしまいます。今後も検証と反省を繰り返しながら、筑紫病院の基本理念である「あたたかい医療」を提供できるよう、気を引き締めて病理診断部門の充実に取り組む所存です。何もせずに批判ばかりする評論家ではなく、現場で工夫を凝らす労働者でありたい。これが小職の、病理医としての唯一の矜持です。どうか厳しく、しかし、温かい目で病理診断部門を応援していただきたいと願っております。特技はありませんが、川釣りや書写と描画が幼少期から続く趣味です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

腫瘍・血液・感染症内科
准教授

磯部 泰司

この度、高松泰教授のご高配により、福岡大学病院腫瘍・血液・感染症内科の准教授を拝命いたしました。私は1993年に筑波大学を卒業後、東京女子医大病院で初期臨床研修を行い、順天堂大学で血液学の学位を取得し、これまで血液内科医として教育・診療・研究に携わってまいりました。1990年代中期に世界でNK細胞腫瘍の存在が初めて確認され、その腫瘍のほとんどにEBウイルスが関わっていることがわかったことから、EBウイルス感染とNK細胞腫瘍が私のライフワークになっています。これまでに、EBウイルスが実際にNK細胞に感染し、アポトーシス刺激に対し抵抗性を獲得することを明らかにしてきました。また、2000年代初頭まではNK細胞腫瘍は従来の化学療法が無効の腫瘍だったのですが、当時あまり使われていなかった抗がん剤の作用機序と組み合わせが、この難治性疾患に対する有効な治療法となることを示してきました。今回、福岡大学で仕事をさせていただく機会をいただき、この地から難治性リンパ系腫瘍に対する治療のブレイク・スルーを目指していきたいと考えております。福岡の地に来てまだ日も浅く、皆様にはご面倒をおかけすることもあるかとは思いますが、今後ともご指導・ご鞭撻賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

呼吸器内科学
准教授

井上 博之

この度、藤田昌樹教授のご推挙により2020年より福岡大学呼吸器内科准教授を拝命致しました。鹿児島市で生まれ育ち、2001年に九州大学医学部を卒業後、原信之教授の九州大学胸部疾患研究室（呼吸器科）へ入局しました。2004年より九州大学生体防御医学研究所ゲノム病態学教室・谷憲三朗教授のご指導の下、様々な癌免疫療法の開発基礎研究（樹状細胞ワクチン、腫瘍ワクチン、腫瘍溶解ウイルス療法）及び固形癌患者を対象とする新規癌ワクチン療法等の臨床試験に携わりました。2015年より米国シカゴ大学で免疫チェックポイント阻害剤（ICI）の臨床研究、新規分子標的薬の開発研究に携わり、市中の呼吸器臨床を経て、2018年より九州大学呼吸器科にて肺癌の基礎及び臨床研究、大学院生指導に従事して参りました。進行肺癌は近年の複数の免疫療法等の登場により年々予後の改善を認めてきておりますが、まだまだ予後不良な疾患であり、今後新規治療開発やICI治療の効果予測因子に関する臨床研究、教育に取り組んでいきたいと考えております。関係各科の先生方、コメディカルの皆様との連携を大事にしながら、福岡大学の発展に少しでも貢献できるよう精進して参りたいと思います。今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



病理学
准教授

濱田 義浩

—— 昨年の医学会ニュースの自己紹介でも述べた様に、高等遊民志望から一転、医学部に入学し、卒業時は精神科への末練を残しつつ、外科へ入局しました。当時の外科は膵胆道センターといった状況で、術前診断(ERCP、EUS)から手術、術後の化学療法、非切除例や慢性膵炎、胆石に対する内視鏡治療を行っていました。しかし、センター化した外科でも病理診断を学ぶことはできませんでした。もともと手術手技より診断に興味を持っていたこともあり、病理診断という自分自身の膵胆道疾患に対する医療の中の欠片を埋めるべく、病理へと移りました。病理へ移った当初は、これまでの膵胆道疾患のみを扱っていた状況から一変し、全科の診断も行わなければならないことに戸惑いましたが、周囲の温かいご指導の下、医師免許を失うことなく現在に至っています。

当施設には詳細な画像診断から全割による病理診断、長期の経過観察といった全国でも数少ない詳細な膵胆道疾患の資料があります。私自身は、これらの資料を基に膵胆道癌の転移、再発の背景を検討しています。こうした検討ができるのも、一重に消化器外科、放射線科の先生方、労苦を厭わず全割で診断された先人の賜物であり、改めて感謝申し上げます。さらに本年度からは消化器外科、消化器内科に膵胆道疾患を専門とされる先生方が赴任され、カンファレンスや症例の検討会も行われるようになりました。暫く前のひっそり閑とした状況から一変し、新たな息吹を感じています。

病理医の責務は、正しく診断することです。正しい診断とは何かを思惟するに、ポアンカレーが数学の本体を調和の精神と述べたと同様、病理でも患者が不利益を蒙らない、調和のとれた診断が大事であろうと考えています。ともすれば接眼レンズから垣間見えるわずかな組織のみで独善的に診断することも無きにしも非ずですが、詳細な臨床情報に直観と智力をもって確信するまで診て得られた病理診断を併せることで、より正しい診断に近づけるのではないかと愚考しています。また、正しさの検証も必要です。今は亡き恩師から、医療行為の正しさは患者さんが亡くなるまで診ていかないと分からない。最後まで見届ける様に、と教えられました。病理に外来はありませんが、各科の先生方から患者さんの経過をご教授頂きながら自らの病理脳に還元し、「正しい」診断ができる様に努めていきたい所存です。今後とも宜しくお願い致します。



手術部
准教授

重松 研二

秋 吉浩三郎教授のご推挙により、令和2年4月1日付で福岡大学病院手術部准教授を拝命いたしました。1998年に福岡大学医学部を卒業、臨床研修終了後に麻酔科に入局しました。大学病院、北九州市立医療センターで研修した後、2006年から2年間米国the University of Texas Medical Branchへ留学し、熱傷によるケモカインの役割についての基礎研究に携わり、2011年に学位を取得しました。現在は手術室、外科系ICUおよび周術期管理センターで、手術を受ける患者の術前～術中～術後にかけて全身的な管理を行っています。

今年度は新型コロナ感染により手術症例数も減りました。手術室でのコロナ対応に追われる中で、改めて感染対策・医療安全の重要性を学ぶとともに、今までいかに恵まれた環境で周術期管理に携わることができていたかを実感させられました。患者さんに安心して手術を受けていただけるよう、周術期チームの一員として安全で高度な医療技術を提供する努力を続けていきます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。



内分泌・糖尿病内科
准教授

田邊 真紀人

川 浪大治教授のご推挙により令和2年4月1日付けで福岡大学病院内分泌・糖尿病内科准教授を拝命いたしました。私は平成10年に九州大学医学部を卒業、九州大学第三内科へ入局して内分泌代謝領域を専攻しました。平成25年から福岡大学にお世話になっています。前任地の市中病院では内科全般の経験を積む機会を頂きましたのでその経験をもとに、自分の専門領域を窓口としながらも内科医として患者さんを全人的に診療するよう心がけております。その中では他科の先生方にお世話になることが多いため、依頼に快くご対応頂ける当院の環境は大変有難いと感じています。他科の先生方にはこの場をお借りして感謝申し上げます。また何か私でお役に立てることがあればお知らせ下さい。福岡大学では診療・教育・研究に加え、6年にわたり医局長を務め柳瀬先生、川浪先生のお二人の教授のご指導のもと医局運営に携われたのは一人の社会人として貴重な経験でした。今後も一層自らの研鑽に励むとともに、これまでの経験を若い先生方や学生さんに伝えることで微力ながら教室および福岡大学医学部・病院へ貢献できればと考えております。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



再生医療センター
准教授

吉松 軍平

2 020年4月付けで小玉正太教授の御推挙により、再生医療センター准教授を拝命しました。

私は、2000年に東北大学医学部を卒業し、その後帯広第一病院、国立がんセンター東病院上腹部外科、いわき市立総合磐城共立病院外科、昭和大学横浜市北部病院消化器センターにて10年間外科診療に携わった後、2010年に東北大学消化器外科大学院に入局しました。大学院では筋肉内膵島移植をテーマに間葉系幹細胞との共移植による効果を研究報告し学位を取得。その後も、膵島移植の研究を継続し、さらに臨床での膵島分離技術をBaylor Research Institute(テキサス州ダラス)で3年間学んでまいりました。これまで取り組んできた基礎研究テーマは、学位のテーマ以外に、異種移植をターゲットにしたカプセル化膵島移植、microRNAを用いた新規バイオマーカーの探索、自然免疫の抑制による膵島移植の移植成績向上について研究を行ってまいりました。2017年に本学再生医療センターに就任してからも膵島移植をテーマに自然免疫の制御を中心に大学院生を指導してまいりました。臨床面ではこれまで当センターで取り組んでいたヒト臨床膵島移植のプロジェクトを小玉教授の指導の下、継続的に取り組んでまいりたいと思います。膵島移植は第一種再生医療の中ではじめて保険収載された医療として現在注目されております。今後は、さらなる発展を目指して取り組んでいきたいと思っております。よろしくお願い致します。



整形外科
准教授

吉村 一朗

2 020年4月1日より山本卓明教授の御推挙により福岡大学病院整形外科准教授を拝命致しました。私は1994年に福岡大学を卒業し、緒方公介教授が主宰されていた福岡大学整形外科教室に入局致しました。2001年には内藤正俊教授のご指導の下「前十字靭帯不全膝における加速度解析」で学位を取得。学位取得後は米国セントルイス Whiteside

biomechanics research laboratoryに留学しバイオメカニクスの研究に従事。2002年からは福岡大学で足部・足関節における低侵襲手術を中心に診療、研究に従事しております。小さな部分に小さな皮切でアプローチすることは簡単ではありませんでしたが、医療機器の進歩により比較的容易になってきています。足部・足関節は常に靴下や靴により被覆され、日常生活・社会活動・スポーツ活動で大きな負荷がかかる部分です。低侵襲な治療は患者さんにとって大変大きなbenefitがあると考えております。研究・診療を通して福岡大学の発展に貢献出来る様に尽力したいと思っております。今後ともご指導、ご鞭撻の程宜しく御願ひ申し上げます。



筑紫病院脳神経外科
准教授

新居 浩平

令 和2年4月1日より東登志夫教授のご推挙により福岡大学筑紫病院脳神経外科の准教授を拝命いたしました新居浩平(にいこうへい)と申します。

私は高知県の出身で、2001年に福岡大学医学部を卒業し、同年から福岡大学筑紫病院脳神経外科に入局しました。その後は福岡大学筑紫病院や関連の市中病院で脳血管障害、脳腫瘍、頭部外傷など脳神経外科全般の医療に従事し、脳神経外科専門医、脳卒中専門医、脳神経血管内治療専門医を取得しました。また脳卒中の外科治療に関する手技や臨床成績を中心に、学位やその後の研究活動を行ってきました。

2018年12月に、「脳卒中・循環器病対策基本法」が成立しました。これは脳卒中や心筋梗塞などの循環器病に対する予防を推進し、迅速かつ適切な治療体制の整備を進めること、その結果人々の健康寿命を延ばし、医療・介護費の負担軽減を図ることを目的としています。福岡大学筑紫病院においても、新体制の脳神経外科・脳卒中センターでは、脳卒中の専門的治療だけでなく、地域における発症・再発予防やリハビリテーションといった患者さんの生活の質の向上に協力できることを目指して、スタッフ全員で臨床と研究に力を注いでいます。

2019年から「脳卒中予防・地域医療学」の大学院講座も開設され、学生教育だけでなく、専攻医や専門医を目指す若い先生方にも役立つ研修プログラムも充実してきました。私もスタッフの一員として地域医療や研究・教育に貢献できるように精進したいと思っています。今後ともご指導ご鞭撻の程よろしく御願ひ申し上げます。



看護学科
講師

大田 博

令 和2年4月1日付で福岡大学医学部看護学科臨床看護学分野成人看護学講師として着任致しました。これまで約20年間臨床看護師として従事し、2012年より大学での教育研究に携わっております。私の教育研究の関心は、情報社会における看護学(なかでもクリティカルケア)教育、ヘルスケア応用情報です。看護学教育では、教育用電子カルテシステムによるシミュレーション学習、テクノロジーの教育への応用について取り組んでおります。ヘルスケア応用情報では、心筋梗塞や糖尿病患者に対するセルフケア支援システム・遠隔看護に取り組んでおります。また、社会貢献活動として、地域包括ケアシステムの中で多職種連携を目指した看護用語マスタを作成し、現在まで全国の医療機関で実用化に至っております。

今般のCOVID-19状況下において、本学でもオンライン教育を中心としたハイブリッドな教育が行われるようになりました。これからのニューノーマルな社会において、私のこれまでの経験を活かし、福岡大学の社会的な使命達成に貢献したいと考えております。今後とも皆様のご指導ご鞭撻のほどよろしく御願ひ申し上げます。



耳鼻咽喉科
講師

田浦 政彦

令 和二年四月より福岡大学耳鼻咽喉科講師を拝命いたしました。私は平成十二年に九州大学医学部を卒業し、九州大学耳鼻咽喉科に入局しました。平成十四年に大学院へ入学し、九州大学生体防御医学研究所で活性酸素生成酵素Noxに関する研究を行いました。平成二十二年から二年間、九州がんセンターで頭頸部癌について学びました。平成二十六年から四年間、佐世保済済病院で勤務し、頭頸部腫瘍と嚥下障害に力を入れて診療を行いました。平成三十年から二年間、九州大学病院で勤務し、頭頸部腫瘍、音声・嚥下障害を担当しました。これまで学んできた経験を生かして、福岡大学医学部の発展や人材育成に貢献できるよう尽力していきたいと思ひます。今後ともよろしく御願ひ申し上げます。



内分泌・糖尿病内科学
講師

高士 祐一

令 和2年4月付けで川浪大治教授のご推挙により、福岡大学医学部内分泌・糖尿病内科学の講師を拝命いたしました。今後とも何卒よろしく御願ひ申し上げます。

私は、平成21年に群馬大学医学部を卒業し、虎の門病院での初期研修、横浜労災病院での後期研修の後、平成25年に東京大学大学院 腎臓・内分泌内科学に進学いたしました。大学院では、骨ホルモンであるFGF23の産生制御機構と骨に備わるリン感知機構の解明をテーマとした基礎研究に従事し、これにより学位を取得いたしました。その後、徳島大学先端酵素学研究所、福岡大学筑紫病院での勤務を経て、現在に至ります。これまで各地を転々としてまいりましたが、この間多くのかけがえのない出会いに恵まれました。私はこれまでの研究を通じて、全ての臓器は内分泌臓器であり、ホルモンを介して臓器同士は互いに連関していることを知り、このことは私の興味を惹きつけて離れませんでした。

これからは、川浪教授をはじめ多くの先生方のご指導の下、後進の先生方とともに学び、前進してまいりたいと考えております。そして、このことが医局の発展、ひいては福岡大学への貢献につながることを心から願っております。甚だ若輩者ではございますが、何卒ご指導ご鞭撻の程よろしく御願ひ申し上げます。



看護学科
講師

古賀 佳代子

令 和2年4月1日より、福岡大学医学部看護学科 包括支援看護分野在宅看護論の講師を拝命いたしました。私は、看護師・保健師を経験後、平成22年4月より現所属に採用していただきました。私が教育の中で伝えていきたいことは、「人々の生活がより豊かになるよう支援することの大切さ」です。近年の看護教育は、看護系大学が急増し、カリキュラム改正もこの短期間で変化しています。また、疾病構造の変化や少子超高齢社会の進展など医療をめぐる状況は大きく変わり、特に在宅看護の教育はますます重要視されてきています。疾患だけに捉われるのではなく、経済状況や価値観、家族関係等、総合的なアセスメント能力が必要です。常に療養者の立場に立って物事を考えることができるよう、そして在宅看護学の学術的発展に寄与してまいりたいと考えて

おります。その他、地域包括支援センター看護職の人材育成、熊本地震における就労者の健康状態、生活習慣病と自覚ストレスに関するコホート研究にも取り組んでおります。

今後は、これまで学んできた臨床および教育、研究の経験を生かして、福岡大学の発展に微力ながら尽くしていく所存です。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



整形外科
講師

西尾 淳

令和2年4月より福岡大学病院整形外科講師を拝命いたしました。私は、平成7年に福岡大学医学部を卒業し、福岡大学医学部整形外科に入局いたしました。その後、平成11年から大学院生として、福岡大学医学部病理学教室・岩崎宏名誉教授の下で分子細胞遺伝学的技法を用いた骨軟部腫瘍の研究に携わりました。大学院を早期終了後、平成15年からの3年間は米国ネブラスカ大学・Bridge教授の下で骨軟部腫瘍のゲノム研究に従事して参りました。平成20年4月より骨軟部腫瘍班のチーフとして、より良い診療ならびに教育体制を築いていけるよう日々取り組んでおります。

骨軟部腫瘍はチーム医療として対応すべき疾患として認識されており、腫瘍内科、小児科、放射線科などと緊密に連携・協力して集学的治療を行い、治療成績の向上に努めております。また、機能的、整容的観点から、形成外科と連携して切除後の再建も積極的に行っております。これからも、各診療科との連携を大事にしながら診療を行いたいと思います。今後ともご指導、ご鞭撻賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



麻酔科
講師

原賀 勇壮

令和2年4月より秋吉浩三郎教授のご推挙で福岡大学病院麻酔科講師及び緩和ケアチームの専従医師を拝命しました。境界領域・チーム医療という特質上、様々な方々に助けて頂きながら仕事が出来ている事に、まずは感謝を申し上げます。私は福岡大学を平成5年に卒業し、形成外科、救命救急センター、医学部微生物・免疫学講座を経て、平成19年より麻酔科の研鑽を積みました。令和元年10月から半年間、佐賀県医療センター好生館緩和ケア科で緩和ケアの基礎と神経ブロック等の疼痛管理を学びました。癌性疼痛の軽減は、QOLの改善に伴い患者予後も改善しますが、管理に難渋する事も多々経験致します。こうした場合、有効な手法の一つに「くも膜下鎮痛法」があります。現在のくも膜下鎮痛法はポート埋込方式で、点滴から離れられない欠点がありますが、今後、ラインフリーのリザーバー埋込方式の導入に伴い、癌性疼痛の治療が大きく変わる可能性があります。これまでに学んだ形成外科・細菌学・麻酔科学の知識と経験が大いに役立つと考えており、今後も継続的に研究と検証を行う所存です。この分野の発展のため、皆さまのお力添えを頂ければ幸甚に存じます。



整形外科
講師

前山 彰

2020年4月1日付けで、山本卓明教授の御推挙により、福岡大学整形外科教室の講師を拝命いたしました。私は2002年福岡大学を卒

業しまして、内藤正俊名誉教授が主宰されておりました整形外科教室に入局いたしました。福岡大学病院、白十字病院で臨床研修を行った後に、2005年より福岡大学病態機能系大学院にて内藤正俊先生のご指導の下、股関節臼蓋形成不全の研究をさせていただきました。また、2009年より米国ピッツバーグ大学へ留学しまして、膝前十字靭帯損傷の研究をFreddie Fu教授のご指導を受けながら行いました。帰国後は、福岡大学病院に戻りまして膝関節、関節リウマチの診療に携わっております。

近年、培養軟骨移植などの再生医療、生物学的製剤・分子標的化合物などの関節リウマチ治療薬の登場などめざましい治療手段の発展が見受けられます。そのような状況にしっかりと独自の研究を進めながら、遅れをとらぬように日々心がけております。福岡大学病院の発展と人材育成に寄与すべく、尽力して参りたいと思います。ご指導賜りますよう宜しくお願いいたします。



筑紫病院呼吸器内科
講師

串間 尚子

令和2年4月1日付で福岡大学筑紫病院呼吸器内科講師に任命していただきました。私は平成15年に大分医科大学を卒業後、大分大学第二内科へ入局しました。血液内科か呼吸器内科か迷った末に呼吸器内科を選択し、平成17年からは呼吸器内科医として歩んで参りました。研修医時代に血液疾患と感染症の深くて辛いつなかりを痛感し、大学院では深在性真菌症について研究しました。呼吸器内科単独で肺以外の深在性真菌症を診ることはほぼないのですが、学位取得後も縁あって感染症・真菌症に関連した仕事に携わることができ、大分では感染制御、平成27年に福大へ異籍後は肺移植チームの感染症担当サポーターなどの経験も積ませていただきました。筑紫病院でも与えられた職務を全うしながら、自分に何ができるか模索していきたいと思っています。大学の使命である教育・臨床・研究の3つの柱を、どれも手を抜くことなく頑張ってます。未熟者ではありますが、お導きのほどよろしくお願い申し上げます。



筑紫病院脳卒中センター
講師

津川 潤

令和2年4月より東登志夫教授の御推挙により福岡大学筑紫病院脳卒中センター講師を拝命致しました。津川潤です。私は平成12年に金沢医科大学を卒業し、福岡大学病院臨床研修を経て第5内科（現、脳神経内科学教室）に入局しました。入局当時は、神経疾患を広く勉強したかったため専門を絞らず様々な症例を経験させていただきました。神経内科専門医取得後より神経筋疾患の電気診断に研究テーマを絞り電気生理検査を中心に診療を行って参りました。平成29年4月よりシドニー大学Brain and Mind CentreでALSの神経筋超音波検査及び経頭蓋磁気刺激に携わる機会を頂きました。平成30年10月、筑紫病院脳神経外科教室に東登志夫教授が就任される際に、脳卒中センタースタッフとして赴任させて頂き今に至ります。筑紫病院では脳卒中やてんかんなど神経救急診療に従事する傍ら、電気生理検査や神経超音波検査の臨床研究も引き続き行っております。今後は、筑紫地区の脳卒中および神経疾患の診療に貢献できるよう全力で努力して参りたいと思います。未熟ではありますが、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。